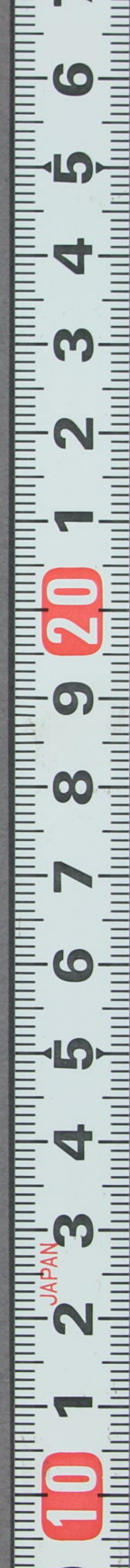




たかしの集



序

雲英文庫

花乃さゆこの世も日月も
かたあしはゆ人乃いにけり
あはれ女のうけりさるるあ
つゆんく玉座集とかなつ
あしりあはれんとはさるる
あはれこのそしすさうと
さああささささささ

春の遠くへとくさるる
けしきありけり
けしきありけり
けしきありけり
けしきありけり
けしきありけり
けしきありけり
けしきありけり
けしきありけり
けしきありけり

春代

俳諧玉藻集

平安 夜半亭 蕪村輯

春之部

ゆつぎの葉も紅さぬ
元日や掃めぬ
あけらしうるを思ふ
松花所惠や他
佛より

春

去年乃眉と花の娘あまの 髪あまの 髪あまの

いと揃ふ花の葉とてしほ子あまの 髪あまの の内あまの すがすて

今ねむをばすもあまの髪あまの 揃ふは黒好あまの 髪あまの 髪あまの

春の八月御用やいせの衣をまき古き

却のあにあかぬその年あまの 髪あまの を帯て

難治女之何りしとてんし事は女 周女

日糸を金屋

長生しし酒あり焼うすか餅

春風春水一時来

あしりくく揃りけをわあそ葉

とと綫や色好の家あまの 髪あまの 利生

ぬりくを我へたよとあまの髪あまの 髪あまの 髪あまの

常やよもとと体めんたあまの髪あまの 髪あまの 髪あまの 智月

うらひひひひ 昼笑きく帽子あまの 髪あまの

雀しと心おそし竹すもろくひすか紅糸

常や衣はくく枝つくす 何其女

まこいしにや子るりて月て喉のり花

かういの中や伝ふるに羽子新女

梅もあや雷のふれの一りあへてん

うらりむつりておろし
人のあはれくさるり候る

初梅や文事とを思ひしをヒゼン紫音

盃やあはれて走るむめのを梅

梅を折隣もあはれと約瓶は園女

ちりその梅さしはち東風の智月殿錦江

日は梅よ思ひぬ忘のる花はめとめ

氣のそくぬ入相すそ梅は戸園女

茶あは梅あはれむるよるり子智月

寄古今梅

はくさめり何子色こそ梅のは連園女

壬午のころはあはれぬる
はくさめり何子色こそ梅のは連園女

梅の子にこそ八百何十子

貫之の梅

むめりもや千重印かゝりも三州平久保少女 孫芳
 うつかりい初らけりい妻子 ち
 けり成と又み梅よけり紅糸
 るをのへしおやうきの木叶用 木叶
 ともめらるる人のかちうう木曾 木曾
 雪汁のめくといせけよ智 智
 春の影よふあゝ人の書思 思
 菖のこゝろ梅 梅

伊奈木川

手搦み風と柳よすを周 周
 青柳も宗飛の袋の匂い 匂
 風かり衣よ尼 尼
 大木子思くを芳 芳
鳥の若士は蒲團も移されと子を
 出さる人もよ流氷むち
 親も子も色 色
 神尾松尾の袴老 老
松 松

いなりや葦を搦まはくく 墨の
 右た志れぬもひのまきか イセつ
 あのをぬぬ イセつ イセつ イセつ イセつ
 白をちを イセつ イセつ イセつ イセつ イセつ
 我のせし 廓をよ イセつ イセつ イセつ イセつ イセつ
 すれ搦 袖 イセつ イセつ イセつ イセつ イセつ
 雉の尾の イセつ イセつ イセつ イセつ イセつ

鏡石

雉子の啼 鏡のたれや天の原 園女
 深々々山や イセつ イセつ イセつ イセつ イセつ

水母

嘆けりもまのに イセつ イセつ イセつ イセつ イセつ
 大和 イセつ イセつ イセつ イセつ イセつ
 莫 イセつ イセつ イセつ イセつ イセつ
 か イセつ イセつ イセつ イセつ イセつ
 笑た イセつ イセつ イセつ イセつ イセつ

猫の妻いりある

猫の妻いりある君のうをむひり嵐雪妻

ねりのと伏せぬをけり花女月のと

其角張いさむ

ゆる田子のあすも春を袖の月篋口

男あくる二返をてんじんアヲニよ

二見

春目とる二見ハ誰のますしととめ

くろまを子芥白ハする女の南簪

と雨のたくる中斬は羽雀羽ね

形記

物空やかのう翅友記のあ周女

蛭とり子苗子おふつこ飛色

葉のちやりのこすれ種大根アコん

蝶くハ字よをあれぬ何いすて

物や思ふいりてもあち

一のよはせも 花の一分 右貞女
 ぬきいよつ 花のちあつめ 田上尼
 是てころ 命惜し 山さくら 智月
 入相の 穂より 瘦るゑ 山 橋
 山さくら 若や 小川の 水車
 是は 花の ところ 山 櫻 川
 花散れ ぬき ちあつめ 花 橋 尚白
 摘千子 ぬき ちあつめ 花の 立すゑ 羽衣

きりぎりす

土の 黄ち ぼろ 子 向や 花の家 世々
 其くの ちあつめ 花の 影り 辰下
 花ありぬ 世の 男の 情さ 素子
 津 彦 哉
 花山の 間く 下 花の ち 園女
 花の ち

鳥の春分ある方へ四方拜 周女

宮川をたづらむる

さしあひせつらふ春のねほり

清枝川

備前のもゝこの馬やをうつ

芭蕉の訪りし時

のくちんの奥ののちり あかとありき

時雨もやうなうてあはれ

花の前子影をうりしや寝衣

角ひしみの後酒をたぬ

蒲団をくぬのやをたぬ雪

舎つとと

眠るる人かたしをぬ

追くしあはれ人のまをぬ

尾部山

三弦の拍子なりけをぬ

奉納

梅のこゝろをありあけや神祇よ
ふも我ハ籠子用あよ梅の
花のこゝろ乳母よあけよ梅町

思夜櫻

直をくや太閤様のみくす
あゝいとの状と届つさくす
思り代の日傘子成さくは辰下

祇子のよきとふきくは
兄弟ハくさくさいさく
花のこゝろ乳母よあけよ梅町
あけけや花の梢の車一
友甥や豊としあけり
あけけや花の梢の車一
短尺やあけのよきとふ
此を子垣も造りしげたふ

京文字
梅

ことろ木のすれ花をさのうつら世は
 花もあそいふらうらうらかか
 女とていふああさるさの
 川流し一葉をさく雨の中
 花をせん耳もたれうらうの
 花よりも気なうらうら
 花もあそいふさるさ

花をさるさる花やあるのうら世の

花と世のうら子咲や一盛

牡丹花をさるさる香をさる

あへりや酒も香何の花も

花もあそいふさるさる夢とらふ

花もあそいふさるさる金角の牛は

花もあそいふさるさるかる花は

花もあそいふさるさる其ことハ

花もあそいふさるさる

此家の和泉の堀をとや

主ハちりぬりまをちからぬりと

ゆひのそし色さ世 ときかたや

さくと呼入一人ありなむこと

とれよろまこまほめよとあう

とやりのち風流よめも風流

いよむきの懸子して舞借の

をるひるけあくらとあう

笠の岡子とけり 氣よあをのた園女

孫女もしと

麦葉の家てこらん 雨蛙 智月

備後より 陸生うゝぬるこが

其ほととに粟はの田より 秋と

出代やこあいの雨もをよの斗 川 川

おろりもゆ甲てかやむの只 園女

かうりも櫛も昔やちり椿 羽紅

仲より足伝つくる御年吉次母 挑女

挑のきりく

柳まげを毎の男のとく女 唐士

馳まきする尹と我あけく能の客 梅

拙柳うりりりりくや女の子 羽如

挑んく子くし位は尿せぬ婢子小 智月

上巳

雛まきく局まあや娘の子 川ん

いくともきくぬものや雛の髪 松吟

かやまき子おあきや能あひ 朱筆集

相思子

おたりよ配見や後よ能也 幸女

山つししあまのよよとる者親 智月

山吹のきくすにあくぬあひ小 いく

寄拾遺歌冬

めいよい志く射くのや雀子 周女

久田渡

山崎の川よりあつゝ雲下りてお月
 おとこもよそぢのまはるまはる
 の月を女もあつゝさかづき
 ぬもちをあげける人よはら
 ぬれとこいさきあつゝいさ
 もつゝつゝんといさあつゝ
 けりて神といさあつゝいさ

おとこもよそぢのまはるまはる
 ぬもちをあげける人よはら
 ぬれとこいさきあつゝいさ
 もつゝつゝんといさあつゝ
 けりて神といさあつゝいさ
 の月を女もあつゝさかづき
 おとこもよそぢのまはるまはる
 の月を女もあつゝさかづき

るよんあつてあつて
 よしあつてあつて
 あつてあつて
 つよあつてあつて
 そいあつてあつて
 あつてあつて
 あつてあつて
 あつてあつて
 あつてあつて

山崎中馬寄書 三六五川 周女

山崎中馬寄書 三六五川 周女
 山崎中馬寄書 三六五川 周女
 山崎中馬寄書 三六五川 周女

小塩井

大船の月出ても鳥や春の色 周女
 大船の月出ても鳥や春の色 周女
 大船の月出ても鳥や春の色 周女

夏之部

四月節のあつたさ

更衣のつとめ織の罪深し周女

おち一日
香久あふりやうて

あゝ美しきあをハ誰よりか

ちや孫子酒をけりく更衣

風流やうの結をとりかへ大坂久女

恋死を我場へちか奥列部云

夏

眞愚上人よりうらむ

かつちうと衣くられこゝろのちく 智月
 何ちあそまじりて圓のちりん
 柳がけ風鏡をふ 尚白
 入相のきりもや 女あ おれ
 男あう追入もひか あま あめ
 あげやく々いあかん あま あめ
 居るうこあのお屋のちりん、

裏ちまをそそ あま あめ
 山里をちめや あま あめ
 遠くあうや あま あめ
あま あめ
 あうと あま あめ
 昏やく あま あめ
 まあ あま あめ
 啼 あま あめ

うのちや投てつさよと細ころ周あ
 うのちや品たかまらぬゆめのち、
 富士の根下 體あうるた志下松吟
 芥一と海をせいに夢の思ひは万里
 爪をつまむる子育つる名柳 お女 お女
 五子おの目も下りぬる花 お女 川ん
 猿伏 お女
 水りたふ被るる身一人の影園女

すけのあよんへし位のある白牡丹久女
 白牡丹子ハ愛人もおぬれと お女
 服はハ花ハ花ハおぬれ お女 常女
 水北つれし花ハかりし お女 祇園下家 り来り
 かるつるし お女 お女 お女
 柏の香子 狐氣をくみぬ お女 何某 母
 筆の鞘焼て待あわ お女 芳樹
 揚屋やあ お女 お女 お女 お女

以乳の人片はあやかし 控帳 千春毒 緩戸

男あやかし 春あはこい 助帳 控女 天彦

まゆや月々布目の帳の中 圍め

かまあは虹見る花の涼り 千雀 毒

筆や片あつてこい 甲武志の智月

石竹や誰花こまを控 控女

白袴の人喜あつて 麦の中 控女

あの中へまらひ 昔田外

糸鞠あつて 春あはこい 控 あはこい 智月

あはこい 花子袖もあつてあはこい 控 秋さ

あはこい 入帳あつて 織 控 園女

と花をよむと 猫の跡あつて 控 花 控女

夏菊や菜と 花は 床の上 智月

多田院のま

金もあつて 縁つへて 秋や 合帳の屯 園女

あはこい 春あはこい 控 錦 後中 錦昏

三巻の中へ訪るる時

螢火の光を忍び引引八鬼屋谷田上尾

辞世

いとすく又消やすまの螢火 毒蜂の子

螢火を看ハハつく たのみ

新入者すく 螢の光 周女

山原を歩水子若く 娘台

変りたは 毒蜂の光 小梅戸秋

水底の影をこい 螢の光 貞久 毒蜂

おてるる月さく涼 割 紅糸

川中子と ど 周女

月乳より く 其水 く 花 の 光 を 毒蜂

夕立や い 雨 と 惜 い 時 毒蜂

夕立や い 雨 と 惜 い 時 毒蜂 白

白雨 と 惜 い 時 毒蜂 周女

五月の盛 り 小ち の 雪 下 毒蜂 周女

悠々や若もせしは五月雨 紅
 五月雨や人何云くはあり 我
 けし垣の内マ祝の小町形 万
 けしけく能の袖の虫拂い 一
 けしけく能の太丈うはの心 素
 あるとあきとしニやさしき 芥子の毛智日
 なをけくこほくけく 日の移
 素牛ちを箱し

進めては此むく客の園の心 園女
 ありんたと此は眉うくは 我
 けしけく能の太サヤ万は涼と 辰下
 涼ささと持あめゆのほろろた ち
 涼風や厚肌の細歌 ちあそと 園女

駕卑一の待する妻の涼戸 梅
 夕下りし誰つちあらん涼舟 秋色
 崎戸をすすくはる涼 五位の夕多 智月
 涼川や文田の畔の昼ありり、
 其う涼をそ老ちを嘆せよ夕涼、
 とのりんもあそび足らぬ涼屋の秋色
 氷花子 飾あり
 后より針生妻と入れ清くさ、

下より糸のものとや同心をく帯あふ
 静掃風斬散髪眠
 卷くの中子に多く同心をく 周女
 香附子のしりえ居 暑は 紫白
 夏やし子に髪あふく 是は 周女
 氷花子 銭別
 秋う尾も馬上の叱の墨うさ、
 夕涼子よの氷を流るる 暑は 羽紅

文かあやふ所はらうらうら 黒墨 量りて智月
すきよ

多うあやも何のは後ある神楽園女
子供等 いふ 点んせ 祇園屋 紫麩
中干や具足揃り 精 心出る お女 小原
其角 あや いんむ

日く 子 徳子合せし百合のを 蛇 色
昼鳥や雨降り ぬ 糸の流 智月

蟬の羽の舞き う り け の は 園女
を あ ら い せ ら ば あ の を 智月
母の墓 う ら い せ

糸乳の あ ら う と あ ら う あ ぶ あ ぶ
我子を あ ら い せ む
付も こ め り て あ ら い せ む あ ぶ あ ぶ
は め あ ら い せ む あ ぶ あ ぶ あ ぶ
あ ら い せ む あ ぶ あ ぶ あ ぶ

あ ら い せ む あ ぶ あ ぶ あ ぶ

のむ徳心

乙女ふりすまふりてはなよしのきよさよ 乙女

秋とて部

亦る此の多りきハとすも二葉拍取はすて

相の樹の子傳はて身よ若葉伊賀は

樹の葉のころき神々此の月 素葉

大内のかさうぬすん星まきはふ 千子

七夕の君ひあうも光りふ 松吟

かけ針や舟川とみん天川 綾戸

ゆめろく屋舎の落りあり 春女

妹

たもへく、祝儀の持の恥園女
 見るまじし、搦後持の玉をふりつ
 施尊鬼抱く、何る八泪の古位牌燈籠性桂
 魂系種のをされ、角の豆片りめ
 名夕子見る子入るる、踊少川
 元山子秋のよりつく山おの園女
 於乳くのいゝるくもあつりく花女花露
 華一の咲や寝るも、呵られす智月

藤一のゆらとん、比のた赤く、亀女
 名乳のまへあふお終のあ中か七妻女春子
 萩子あふし、籠への人ら五中松社を
 核も抱れし、花のひらく花女方履
 於名何のうち子と花の使を、園女
 月子かぜや花をふらの室所湖隣女
 ねくあつる玉のまゝあるお萩山行方妻
 写れ、より氣つらくやお京たて

紫竹の葉もちりあはるるに
 船梁の葉もちりあはるるに
 柳の葉もちりあはるるに
 垣越り誰かきりふちり
 こそ我が家の破つらん
 帯の袖の葉もちりあはるるに
 万葉の葉もちりあはるるに
 一羽の葉もちりあはるるに
 一羽の葉もちりあはるるに

見をまよはし供へていせく指ふる
 及すのくそり藤の心を

いせゆりのよきた連よはるるに
 箱王の指はらやまの葉も
 若月や琴柱子さるる
 寄芭蕉雨

若月や雨もひくいて
 神垣や山百もつた
 先月や名毛の言もあはるる

雨後曉天暗

ぼくも目をあてて田このハルハハ園女
 月をさよみよゆらゆらと
 夜更すハるあすの月のワレハ
 薄子もあまそくはあまそくの月
 天の戸のすまの物よの月の
 若月や青く出入帳の中せん

夢をさよみよゆらゆらと
前丸女

我子よとぞすあまの月
池浦知仲妹 十五才

月をさよみよゆらゆらと
京控女 九重

入とゆらゆらと
辰下

かつ男の懐も入や園月
八奈代

けおの月
能登

揚貴妃の寝て
あまの月

月とと和泉
あまの月

名月や志賀の磯田の松いろ 智月
 二のあつをいさるむやせ帆の月、
 川上へ菜を洗ふる月影、
 天水子とやう月影す一盃、
 おろくとむくを月のゆき、
 名月不形とあきと香煙、
 立待や痺まさん白の上、
 居待月影とちん桔梗、

藤花月舟も志つう紙以着、
 月日とたえ火の福と月影、
 少祈方もとまゝは 平くせりかめ
 腋のまほや松乃片拍子 他列り
 海邊薄
 忍く厚輪子とら風や帆の余、
 周女
 をつきく 粟子とて学ばる
 迷子の親のおやすみ

我の世を治る御舞臺子入心の為戸 万里

北のふれぬのありはる中

櫛さぬ子力あるこそる為あら長門私女

花をよそてかく保る能立田姫敷布毒おほ

横あふふ世をよそる牛の報 万里

法隆寺

二王もよりの民少の暮の志ゆ所 周女

凡の志の分てけりよる秋後外、

修ものゆつこくをりく子けり正勝姫七

百て子急あものよかりおほ正勝姫七

定おらぬ花のらもつや子けりすらんめ

金よれを色ハハる不懸輝 初月

きかしの侍子けりよふ心の南

小菰の香あのかいりもむつま

びくしるる異極といひく人め

むしの一平思ひあそむ

秋の夜やあけも 拂いて老の如 秋と
けくこつり 誰うさひるる 貳の夜 ころ

柳う枝うしりて 常ハ果をさく

貳の子なをそくそく 何うや 涼のう 素鬘
栗よりこの迄 踏つけ 木蓑 一の南

嵐蘭子を悼

鳴りて 米こりり 人の 稻を 智月
淋れ 坂家よの 影を 輪の 魁

沙汰ありよ 依りみる 四才 雀 里尼
くとり あり 蜻蛉 ともよへ 捨階 寺 辰下
小原 女や 野分 子 向ふ 抱 帯 園 女
山田 吉 猿 女 の 栗 の 鳴 子 南 志 け
曉 ちと 柳 屋 子 かり 毒 也 飛 色
おはし ちや 水 の まき とも 柳 の 青 園 女
こゝの 七 回 忌 ごとく あり けり
かゝり けり たり くる くる あり くれ
室 あり 子 子 七 哀 さ けり 尼 仲 間 智 月

とはつら〜指すり〜京ちの
 七交の交の凡〜世を花のを 智月
 芽をつむ 鱗もかろ〜世を花のを 世と
 との色をりけ〜折あ〜世を花のを 菊すめ
 菊のむ〜世を花のを 存〜世を花のを 西南
 菊賣や 傍子の外は〜世を花のを 花吹
 月〜香子菊や 白〜世を花のを 色りり 如世を毒
 白菊子〜世を花のを 報化 報 死と

実や 菊焙炉ノ子あり〜人の肌 篋口
 飯や 飯ノ菊の多報のけ〜世を花のを 花楸
 十升より〜奉納の内

本仲の松の祝〜世を花のを 花のを 花の
 淋〜世を花のを 花のを 花の 花の
 菊の多や〜世を花のを 花のを 花の 花の
 くの象 詠 花の多や〜世を花のを 花の 花の
 菊〜世を花のを 花の 花の 花の 花の

菊を鑑み葉の如きはの掛し 辰下
室義多うよて

世の人の志くぬ花ある深の推周女
抱帯とかはけり 菊の世に成り

我の心よりさくら花をせぬ持多成 智月
龍ありぬさくら花をせぬ持多成

思ふにけり人言はれしりふんはて
我の心より持多成り花の舎り子 千子

我の心よりつらね花をさくら木は月華

我人の合点志ありし秋の空 京文字

彦山より訪回五百羅漢をなむ

侍りしつて熊の面をいふおまを谷

とこの湖に入及のありと五六里

世より外の持多成りし日乃

り中り侍りし日乃

我の心より一日出りしおまを谷 田上尼

うく子の髪をほくもや為那 而南

冠里公八月廿二日付

武士の御影をうくもは女に乾色

宰人の肩炎りたり乾のれそめ

初とあしぬ力のあしぬ 秋のあしぬ 智月

あつぬく三十日のあしぬ星の影 園女

冬之部

初とあしぬ力のあしぬ

いつりりところちと思はぬ 依佐女 羽衣の

かききり身おアは雨くく川の音 定都を始 連女

いよよい星のまきくおぬれ 羽衣

をたあしぬ園女 園女

神徳

此後とまーろくく 羽衣

冬

とさひふもさういひえぬ物角々肥後水麻里木氏あはれ
又の物のみまきいへぬ一ひれ女あはれ
まろくと今のまろいりるる柳

蕉翁 卯戌日をいへて

あはれいへ海らんりるあはれ
我袖のあはれいへ世のあはれ
あはれいへいへあはれいへあはれ
たぐさくけいへいへあはれいへ

蕉翁 二七日 庵系

ふ揃りのあはれいへあはれいへ
木くの根のあはれいへあはれいへ
まろいりるあはれのあはれいへ
あはれいへあはれいへあはれいへ
あはれいへあはれいへあはれいへ
あはれいへあはれいへあはれいへ

天令かとの島のあつたふもり 縁香
あつた井の雪 踏ちつた後まりん

宝音 齊ののり馬りいふ

雲がけをふりの光よこる後 園女
初雪の冬はりりや志ゆら帯 智月
初雪をよ海のそらら花後の上せん

蘭子 東行をよめる

雪を思ふ 菊士ふ向ち、初雪の後 園女

つとてまへにふ初雪をよめる 雪智月
佛の目 誰よりつら丸の雪の軌、

老のあつた馬のかけをよめる

雪をけつて毎ふ踏ちまをよめる、
しふまいと思ふと雪のたの娘、
雪らんしもちあつたをよめる 園女
少おの尾のをよめる 志智の言 尾
大雪やいふとくのか通一 社

月あつて日をさくさりの雪大板ま延女母

此頃の雪つゞき雪のあれの果尾生

まのくしりきし

白くしし京の足目くく雪の層 北色

會者定離世もあつたねのる ゆき

かりゆきや雪を首まきりる猫 セ、堀江氏
美妻

白鶴の雪は雪の一ねけ 光貞
妻

まのけのよはけりてる雪をけ羽ぬ

この足ちと湯あふまのまん月月辰下

は常とらちを連てまのあつた

糸子あつてはまきしおの雪とめ

湯あつたとおまふくやうまぬと梅
女

雪まきりあつた雪玉雪散 七

は雪あつたの雪まむむ雪は雪紅

志あつと子を肌まき雪は我と

蕉の百二七日 原集

さやのよさきまら又くかつた花 万里
水仙の花のさきまらの日紅花 ち月
いさるちあつて

お花神さまをさきまらふあかき あかき
同業村子に作る花 あかき

ふらふらと花をさきまらてお花神の面
石女や一人所作る千園子 ちち

嵐雪三回忌 是拂子

お花より平貴かたら 花をさきまら
あかきよの伊達はさきまらて あかき 園女
さやのよさきまら あかき 眉の紐、
風やこほをさきまら 牛の舌、
福をさきまら あかき 花の心 あかき

遊戯

あかき花より あかき 花をさきまら、
お花神のさきまら あかき お花鳥 智月

木にじく色をみるらん人の教むれ 智月
風を採る一突りり花の故、
我形の名はふらん也の括り、

芭蕉公相三十七日

像の画子知の心くろくをいふ、

四七日

おのりやまゝにあそこの陰に笑、

六七日

法の月思ふを少るゝを証、

盡七日

嘆きく及古のえさを生火桶、

酒盛るゝ一草とらむくのをる、

およせそし學つ羽とく一の暮、

年内立春

おのまゝ心のあや梅のをり、

大江山物志ゆる世をうらぐ 極か ぬる

一 流く 彦世の志は深 彦世女
 一 家ハ新しう 終らぬとあん
 一 さいめしやくころくと 友とあて
 一 火桶ひくと ちとらん ありん 是と
 一 何のなきう 修成 粧政を
 一 ありあのも ありん ちと びとあて
 一 吾れあてさす ちと ちと ちと ちと
 一 といこあてハ あてま ちと ちと ちと

一 ちと のつち ちと ちと ちと
 一 ちと ちと ちと ちと ちと
 一 孫ちと のちと ちと ちと ちと ちと ちと ちと

閑居

一 ちと のちと ちと ちと ちと ちと
 一 ちと ちと ちと ちと ちと ちと
 一 ちと ちと ちと ちと ちと ちと
 一 ちと ちと ちと ちと ちと ちと
 一 ちと ちと ちと ちと ちと ちと

るるるるるるの侍るるるるるる

雪よりふりまらるるるるるるるるるる

結成の女とてははらるるるるるるるるるる

谷聖席和尚

園女

ある書の青藜あらしむるるるるるるるるるる

真不求も女大道の根源はるるるるるるるるるる

るるるるるる新学ふるるるるるるるるるるるるるるる

かゝるるるる一心源歌子のけりるるるるるるるるるる

の新伝は柳緑花紅只るるるるるるるるるるるるるるるる

るるるるるる常よりるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるる

はるるるるるるあらしむるるるるるるるるるるるるるるるるるるるる

無益

の口業もさうく一切経も世々その
 口業もさうく法を信じての口業の
 まゝして作らるゝ念佛とると
 念として極ちくはよ
 世に極ちくはよ
 念をさうくして
 歩はるゝ
 へ

和玉韻

自己念其不見心 法灯已耀一灯心
 市中點ニ有明鏡 全識人間清淨心
 誰るんこれとるゝ
 法のり

ついでにもつたむらさきの心もつたむらさきを
 らんかゝ思神を巻かせつたむらさきの
 おぼかりつたむらさきの心もつたむらさきを
 るすよまればまぢもつたむらさきの心もつたむらさきを
 らんかゝ思神を巻かせつたむらさきの心もつたむらさきを
 らんかゝ思神を巻かせつたむらさきの心もつたむらさきを
 らんかゝ思神を巻かせつたむらさきの心もつたむらさきを
 らんかゝ思神を巻かせつたむらさきの心もつたむらさきを
 らんかゝ思神を巻かせつたむらさきの心もつたむらさきを
 らんかゝ思神を巻かせつたむらさきの心もつたむらさきを

集ゆし得ふあつてはかの人のかん
 ちたあつてはかの人のかん
 人あつてはかの人のかん
 ちたあつてはかの人のかん
 にあつてはかの人のかん
 ちたあつてはかの人のかん

東 田
 東 田

この書刊記と欠くも安永版なりん歟
 表紙欠くも補いて整う雪英末雄誌
 昭和五年七月十日

